大分市歴史資料館年報

（平成11年度）

2000

はじめに

平成11年度の年報をお届けします。

歴史資料館は隣接して国指定史跡豊後国分寺の史跡公園があり、周囲は夏から秋には稲作、冬は麦作、台地斜面には自然が残り、と環境に恵まれています。郊外の人の寄り付きにくい場所で入館者数の増加には苦労しておりますが、資料館を訪れた人の心を和ませるこの自然環境は本館にとって非常に大事なことと思われます。しかし、資料館前にはＪＲ久大線豊後国分駅があり近い将来周辺地域の開発も予想されていますが、なんとか自然ののこる方策を考えてもらいたいと思っています。

本年の秋季特別展は、本館所蔵の源氏物語絵屏風断簡23点の美術史的位置を市民に理解して頂くために、『光君の物語　源氏絵の世界』展として開催しました。歴史系博物館の本館としては、初めての美術史観点からの特別展となりました。大人の入場者数は前年度（「おおいたの遺宝　指定文化財を中心に」）と比較して増加しましたが、小中学生が減少しましたので、総入場者は前年度より数百名の増加に留まりました。入館者数増加には日頃から職員一同努力していますが、なかなか成果があがらないものです。

秋季特別展の他、年４回のテーマ展示、歴史・考古・民俗・古文書・ジュニアなどの各種講座を毎年行っておりますので、今後とも、資料館を御利用下さり、ご支援下さりますようお願いいたします。

平成12年３月31日

大分市歴史資料館
館長　木村　幾多郎

目　　次

展　　示 …… 1

テーマ展示　特別展示

研究ノート …… 4

土佐派における源氏物語絵場面の継承について　長田弘通

資料調査 ……22

資料収集 ……23

教育普及活動 ……26

図　　書 ……28

資料館利用状況 ……36

管理及び運営 ……38

歴史資料館協議会　組織・職員

施設管理業務の内容

施設の概要 ……40

条例・規則 ……42

日 誌 抄 ……48

利用案内 ……50

展　　示

テーマ展示

本年度は、以下の内容のテーマ展示を開催した。

第１回　「南蛮交流史」

会期　４月24日(土)～６月27日(日)

（開館日数　55日）　入館者数　3005人

1551年のザビエルの府内来訪を機に展開された郷土大分とポルトガル・スペイン諸国との政治・文化の交流の歴史を、南蛮屏風やイエズス会日本年報などの資料を通して紹介した。

〈主な展示品〉南蛮屏風（模写）、シャッピ著『ローマ教皇グレゴリオ13世伝』、メンデス・ピント著『航海探検廻国記』（東洋遍歴記）、トリゴー著『日本におけるキリスト教の勝利』、グァルティリエ著『天正少年遣欧使節記』、ランタカ砲、西洋古楽器、花鳥文蒔絵螺鈿洋櫃、南蛮人図鏡、南蛮兜、オルテリウス「韃靼（タタール）図」、スピード「中国・日本図」など

第２回　「柞原さんのお祭－賀来野市と浜の市」

会期　７月３日(土)～９月26日(日)

（開館日数　71日）　入館者数　2041人

柞原八幡宮の祭礼市で知られる「賀来の市」・「浜の市」の江戸時代の有様やその歴史を、絵巻・絵馬・文献史料などで紹介した。

〈主な展示品〉「御城下絵図」、絵馬「當社放生会御幸之図」（複製品・原本　柞原八幡宮蔵）、「御神幸図絵」上下２巻（柞原八幡宮蔵）、「御普請所之内、浜之市部」（柞原八幡宮蔵）、『由原八景』、「豊国紀行」など

第３回　「地図にみる昔の大分
－近代地図を中心に」

会期　12月４日(土)～１月30日(日)

（開館日数　43日）　入館者数　738人

絵・地図を通して、明治から昭和前半にいたる大分の市街地の有様や、その変遷を紹介した。

〈主な展示品〉「第６回九州沖縄八県連合共進会図」、「大分町図」、「大分町全図」、「大分県管内全図（明治45年）」、「大分市街新地図（大正６年）」、「大分別府案内（大正10年）」、「大分市街新地図（昭和４年）」、「大分市鳥瞰図（昭和９年）」など

第４回　「大分の先人
－賀来飛霞・後藤碩田・滝廉太郎」

会期　２月５日(土)～３月31日(日)

（開館日数　47日）　入館者数　1749人

賀来飛霞（本草学者：1816－94）、後藤碩田（歴史家：1805－82）、滝廉太郎（音楽家：1879－1903）の大分ゆかりの人物について、遺品を通して、その足跡や業績を紹介した。

〈主な展示品〉伊藤圭介著・賀来飛霞述「救荒植物集説」、賀来飛霞「植物写生図」18点、後藤碩田画像、碩田筆「豊後国図田帳考証草稿」、碩田旧蔵「先賢故実肖像略写」、碩田旧蔵「佐藤忠信冑図并記」、（以上碩田資料は後藤進氏蔵）、廉太郎自筆楽譜「花盛り」・「海邊納涼」、廉太郎の写真・書簡・眼鏡など。

研究ノート

土佐派における源氏物語絵場面の継承について

長田弘通

はじめに

源氏物語絵とは、わが国古典文学の最高傑作である『源氏物語』に題材をとった絵画の総称である（以下、源氏絵と呼ぶ）。その歴史は物語の成立直後平安時代、11世紀初めにまでさかのぼるといわれる。現存する最古の源氏絵は12世紀前半に成立した国宝「源氏物語絵巻」であるが、この作品以降、特に桃山時代・江戸時代初期をピークに、じつにおびただしい数の源氏絵が描かれてきた。

作例豊富な源氏絵に関する研究も、その現存作品数に比例するように、これまた豊富である。ここで先行研究を整理することは筆者の力量を越えているため省略するが、近年の源氏絵研究を集大成した著作として『豪華［源氏絵］の世界　源氏物語』(1) が挙げられる。この中で田口榮一氏は「源氏絵の研究は、第一には、（中略）場面選択の意識や絵画化の構想の問題、そして第二に、そのようにして創り出された図様がどのように次の画家、ないしは次の時代に継承され、あるいは変容を遂げていったかという図様の継承と創造の問題、この源氏絵がもつ構造に関わる二つの問題を、現存作品に即して具体的に解き明かすことにある。」(2) と源氏絵研究の方向性を打ち出されている。そして、この場面選択の原理と図様の継承・変容を明らかにするため、「源氏絵帖別場面一覧表」を作成・掲載された。

そこで、本稿では、田口氏が示した場面選択と図様の継承および変容について土佐派の諸作品を題材に考えてみたい。田口氏の「源氏絵帖別場面一覧表」においても桃山時代から江戸時代初期の土佐派による主要な源氏絵作品が取り上げられているが、本稿で再び土佐派作品を対象とするのは、土佐派が源氏絵をお家芸として、最も多くの作品を残しているからのみならず、次の二つの理由からである。

第一には、通常、個別作品の研究においては、研究対象とした作品と他の作品の場面・図様との比較は行われるものの、ある画派を対象とし、時代的に場面選択・図様の比較を行った研究はこれまで試みられていないようである。このような問題意識に立つ時、歴代の宗家が必ずといってよいほど源氏絵画帖を残している土佐派がやはり最も考察対象に適しているからである。

そして第二に、田口氏の論考以後、室町時代にさかのぼる土佐派画帖が発見された。これにより、室町時代から江戸時代初期を通じた土佐派作品の比較が可能となったからである。

以上の問題意識から、土佐派歴代宗家およびその周辺の作になる源氏絵画帖・色紙を検討対象に考察していくとにする。ここで画帖と色紙作品に限定したのは、場面継承の傾向を数量的に考察するため、基本的に物語各帖一場面ずつを描いた作品が適しているからである。

1．検討対象作品

ここでは、問題解明のため検討対象とした土佐派作品について、それを選んだ理由を含め略述しておこう。

①源氏物語図扇面貼付屏風　尾道市・浄土寺蔵
室町時代（15世紀末～16世紀初）

源氏絵が描かれた扇面60面を六曲一双の屏風に貼り付ける。以下浄土寺本と略称する。60面ではあるが、描かれているのは『源氏物語』54帖中40帖である。永享6年（1434）に七夕飾りに源氏絵扇面屏風が使われた記事(3)を初見に、室町時代の貴族の日記には扇面貼付屏風がよく登場するが、本浄土寺本はその最古の作例であり、室町時代を代表する源氏絵である。

厳密には土佐派の作品とはいえないが、室町時代から江戸時代初期の図様の継承を考える上で欠かせない作品であり、検討作品とした。

②源氏物語画帖　ハーバード大学美術館蔵(4)
室町時代（15世紀後半～16世紀前半）

近年発見された画帖形式の源氏絵（ハーバード本と呼ぶ）。『源氏物語』54帖から一場面ずつを描き、それぞれ詞書と対になる。その画風は土佐光信の作である「北野天満宮縁起絵巻」（1503年制作）、「清水寺縁起絵巻」（1517年制作）との相関関係が明らかであり、光信ないしその工房の作とされる。

土佐光信（?－1522年頃）は文明元年（1469）宮廷の「絵所預」を安堵されており、以降天皇・上流貴族のみならず、室町将軍・武家、有力寺社のために精力的に制作を続け、大永2年（1522）頃亡くなった。これまで土佐派による源氏絵制作は永禄3年（1560）光信の子光茂による巻9「葵」を描いた「車争図屏風」が初見で、土佐派の直系が途絶えた後画派を受け継いだ光吉の時「お家芸」として確立したとされてきた。しかし、本画帖の発見により、土佐派の源氏絵制作の伝統が光信の時代－室町時代までさかのぼることが明らかとなった。

④土佐光吉・長次郎　源氏物語画帖
京都国立博物館蔵(5)
桃山時代（17世紀初期）

『源氏物語』の内、巻1「桐壺」～巻48「早蕨」まで一場面ずつと巻4「夕顔」・巻5「若紫」巻6「末摘花」・巻10「賢木」・巻11「花散里」・巻15「蓬生」を重複して描く（京博本と呼ぶ）。それぞれ詞書と対になり、画帖に仕立てられている。二帖の画帖から四帖に改装された際、巻1「桐壺」から巻35「若菜下」の絵の裏に「久翌」の墨印が押され、重複6場面の裏には「長次郎」の墨書があることが判明している。そして、墨印も墨書もない巻36「柏木」～巻48「早蕨」はその画風から重複6場面を担当した「長次郎」の手になるとされている。「久翌」とは土佐光吉のことで、本画帖は巻1から巻35までを光吉が描き、巻36から巻48までと重複6場面を光吉の側近と推定される長次郎が描いたことになる。この分担は光吉が「柏木」を描いた所で老齢のため絵筆が取れなくなり、残る早蕨までを側近の長次郎に指示しながら描かせた。ここで光吉は他界してしまい、長次郎が注文主の意向を受けて巻49「宿木」～巻54「夢浮橋」ではなく、光吉がすでに描いた場面を重複して描き、54場面からなる画帖を完成させたとする説が有力視されている(6)。このことから本画帖の成立は光吉が他界した慶長18年（1613）ないし翌19年とされる。いずれにしろ本画帖は土佐光吉とその側近長次郎の作であることには間違いない。

土佐光吉（1539－1613）は土佐宗家光元の弟子である。土佐家は光元が永禄12年（1569）戦死したことで直系が途絶え、光元の遺児3人を光元の父・光茂から託された光吉が京から堺に移り住み、土佐家の伝統を守り画業を続け、土佐を名乗ったのである。光吉から本画帖事業を受け継いだ長次郎については光吉の側近と推定されるのみである。画風において光吉の子とも弟子ともされる土佐光則との近似性が指摘されているものの、詳細は不明な人物である。

⑤土佐光吉　源氏物語手鑑
和泉市久保惣記念美術館蔵(7)
桃山時代（17世紀初期）

詞書と絵それぞれ80面が対になる源氏絵で本来は画帖形式であった（現在は1対を1枚の台紙に貼る。久保惣本と呼ぶ）。絵は約縦20×横26㎝前後の横長色紙に書かれ、詞書色紙の大きさはまちまちである。『源氏物語』54帖からそれぞれ1～3場面ずつを描き、今回検討対象として源氏絵の中では最も場面数の多い作品である。 80面の絵のうち4面に「土佐久翌」の墨印が付随しており、全体を通して土佐光吉によって描かれた作品である。また、詞書3段を担当した山科言緒の日記により、本手鑑が慶長17年（1612）当時美濃国大垣藩主であった石川忠総の依頼で源氏研究の権威であった中院通村が斡

旋者となり、制作されたことが判明している。久保惣本は制作年代・発注者・絵師名が文献などで明らかとなる稀有な作品でもある。

⑥土佐一得　源氏物語図色紙貼交屏風

六曲一双　東京国立博物館蔵(8)

桃山時代（17世紀初期）

六曲一双の屏風に源氏絵が描かれた色紙23面と詞書49面を貼り交ぜる（東博本と呼ぶ）。色紙絵23面は画面の大きさに大小２種類あり、巻12「須磨」・巻22「玉鬘」それに不明場面を描く小形の３面は大形色紙に同一図様があり、描写場面は19場面となる。

絵の裏に押された印により土佐一得の作であることがわかる。一得は土佐光吉の門人とも弟もいわれるが、生没年も含め詳細は不明。ただし、活動時期は桃山時代後半－慶長年間であり、光吉の源氏絵がその周辺にどのように受け入れられたかを検討する対象として取り上げた。

⑦源氏物語図色紙　28面　堺市博物館蔵(9)

江戸時代初期（17世紀前期）

『源氏物語』54帖から一場面ずつを描く（堺市博本と呼ぶ）。現在は28面しか残らないが本来は54面揃いの作品と考えられる。

全体をとおした描写方法や人物表現に京博本のうち長次郎担当画面に近似性が指摘されており、長次郎ないし長次郎同様光吉周辺の絵師による作品の可能性が高い(10)。そのため東博本と同じ理由で取り上げた。

⑧土佐光則　源氏物語画帖　徳川美術館蔵(11)

江戸時代初期（17世紀前期）

『源氏物語』54帖中、巻２帚木・巻５若紫・巻12須磨・巻46椎本・巻49宿木・巻52蜻蛉の６帖から２場面ずつ、残り48帖から一場面ずつ計60面の絵と詞書からなる画帖（徳川本と呼ぶ）。各図の裏面に「土佐光則」の墨印があり、作者が土佐光則とわかる。

土佐光則（1583－1638）は土佐光吉の子とも弟子ともいわれ定かでないが、光吉が亡くなった後、土佐派を守った人物であることには間違いない。寛永12年（1634）には堺から京都への移住を果たすが、宮廷絵所預復帰には至らなかった。

光則は光吉と同じく多くの源氏絵－特に画帖や色紙を残している。ここでは本徳川本と白描の画帖を取り上げ、光吉によりほぼ完成された近世土佐派の源氏絵図様の展開を検討したい。

⑨土佐光則　白描源氏物語画帖

バーク・コレクション蔵(21)

江戸時代初期（17世紀前期）

『源氏物語』54帖から各帖１場面ずつを基本に、巻２帚木・巻５若紫・巻12須磨・巻13明石・巻28野分・巻45橋姫の６帖からは２場面、計60図をほぼ墨だけで描く白描源氏絵（バーク本と呼ぶ）。詞書はない。各図の裏面に「土佐光則」の墨印があり、土佐光則の作であるとわかる。

⑩土佐光起　源氏物語画帖　個人蔵(13)

江戸時代初期（17世紀半ば）

『源氏物語』54帖から各帖一場面ずつを描く計54面と詞書が対になる画帖（光起本と呼ぶ）。巻１桐壺図の裏に「土佐光起」の朱印があり、土佐光起の作とわかる。各詞書裏に書かれた筆者の名前・官職から万治元年（1658）前後の制作と推定されている。

土佐光起（1617－91）は土佐光則の子。父ともに寛永11年（1634）活動の舞台を堺から京へ移し、承応３年（1654）土佐光元以来途絶えていた念願の宮廷絵所預に復帰した。このため光起は後代、土佐家再興の功績者として称えられた。

⑪土佐光成　源氏絵詞　静嘉堂文庫蔵(14)

江戸時代前期（17世紀後期）

『源氏物語』54帖から各帖一場面ずつを描く白描図54面と詞書が対になり、書冊形式をとる（静嘉堂本と呼ぶ）。表紙に書かれた「源氏絵詞」の題の下に、「土佐光成図」とあり、土佐光成（1646－1707）の手になるとわかる。

土佐光成は土佐家の再興を果たした光起の子で、光起の跡を継ぎ、宮廷絵所預となった。

⑫住吉如慶　源氏物語画帖　個人蔵(15)

江戸時代初期（17世紀前期）

『源氏物語』54帖から各帖一場面ずつを横長の色紙に同じ図様で彩色画と白描画で描き、それぞれに詞書と対になる（如慶Ⅰ本と呼ぶ）。絵氏名を示す印や署名はないが、住吉如慶筆と伝えられ、描写法からも如慶による寛永年間末頃（1640年代）の作品と推定されている。

住吉如慶（1599－1670）は幼年時代土佐光吉に学び、続いて光則にも師事し画業を修めた。のちに京都へ移り、寛文２年（1662）後西天皇の勅により鎌倉時代以来途絶えていた住吉姓を名乗り、近世住吉派の祖となった。土佐光吉の源氏絵を如慶がいかに継承し、住吉派の源氏絵を完成させたのか、その傾向を探るためここで検討作品に取り上げた。

⑬住吉如慶　源氏物語画帖　個人蔵(16)

江戸時代初期（17世紀半ば）

『源氏物語』54帖から各帖一場面ずつ計54面を描き、詞書と対になる画帖（如慶Ⅱ本と呼ぶ）。各図の下方に「住吉」と「法橋」の印があり、住吉如慶の手になる作品とわかる。この「住吉」印と詞書に付された筆者の没年から寛文２～６年（1662～66）に制作されたとされる。

⑭住吉具慶　源氏物語絵巻

茶道文化研究所蔵(17)

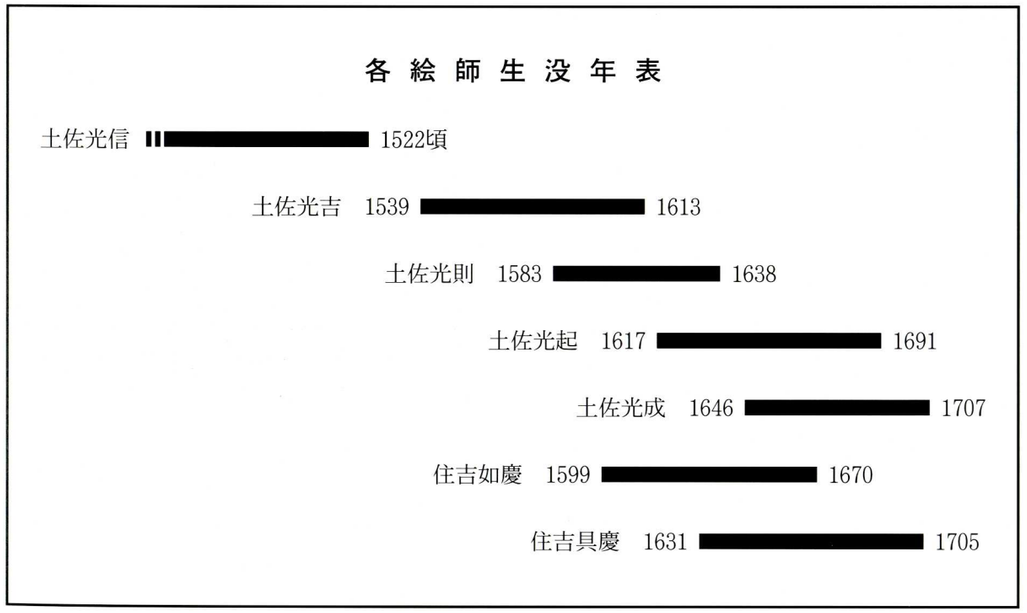
江戸時代初期（17世紀後半）

『源氏物語』54帖から各帖一場面ずつを描き、詞書とともに絵巻に仕立てられる（茶道本と呼ぶ）。全５巻。第５巻末に「土佐住吉広純」の署名と「広純」４の印があり、住吉具慶の作であるとわかる。「広純」の名乗りから延宝２年（1674）の得度以前、さらに、詞書筆者の官職・没年と合わせ、寛文年間（1660年代）の制作と推定されている(18)。

住吉具慶（1631－1705）は住吉派の祖如慶の子。宮廷・幕府の仕事をよくこなし、天和３年（1683）幕府により江戸に召し出され、幕府御用絵師となった。

２．場面選択・図様継承の傾向

上記14作品について各帖別の描写場面をまとめたのが、表１「源氏物語絵土佐派作品別場面集成」である。なお、14作品のうち、茶道本については、全ての場面を実見していないため、各場面は『豪華［源氏絵］の世界　源氏物語』所収の田口栄一氏作成の「源氏絵帖別場面一覧」を参照した。「新岩波大系」欄は各描写場面が『新岩波古典文学大系　源氏物語』一～五（岩波書店）のどのページにあたるかを示している。



各作品が描く帖別場面を○印で示した。これは単に同じ場面を描いているという意味で、図様の一致までを意味するわけではない。同じ場面を描く作品の図様の特徴については「備考」欄で略述した。本項では、この表１をもとに、土佐派及びそこから分かれた住吉派における源氏絵の場面選択と図様の継承の傾向について概観することにした。

本題に入る前に、まず、各作品が描いた総場面数についてみてみよう。検討した土佐派14作品が描いた場面は最も少ない巻16「関屋」で１場面、最も多い巻５「若紫」と巻12「須磨」で９場面と帖によってばらつきがあるが、ほとんどの帖が４～６場面ずつ描かれ、総数は258場面となる。田口氏によれば源氏絵描写場面は260～280場面程度とされているので[19]、ここで検討した14作品でほとんどの場面を網羅していることになる。ただ、井渓明氏のご教示によれば、現存作品に文献のみで絵画作品は残っていない場面（60場面程度）を加えると500場面を超えるという。この数字を基本にすれば、土佐派はその半数を描くに過ぎない。源氏絵の場面選択においては固定化の傾向が指摘されているが、１帖平均10場面近くが描かれるのは、一面では多様な源氏絵があったこと示していよう。その中で、土佐派・住吉派という画派の中で半数しか描かれないのは、逆説的ではあるが、場面選択の固定化を物語っていよう。

では、本題の各作品間の場面選択と図様の相関関係についてその傾向についてみていくことにする。表１をもとに、作品ごとにそれぞれ同じ場面を描く帖数をまとめたのが表２である。この表は、例えば浄土寺本とハーバード本が何帖おなじ場面を描いているか、そしてそれが全体に占める割合を表している。ただし、作品によっては54帖すべてを描いていなかったり、逆に１帖につき複数場面を描くものもあるので、割合（一致率）をもとめる際の母数は描く帖の少ない方をとった（浄土寺本とハーバード本では浄土寺本の40帖が母数となる）。以下、特徴的な作品の関係を検討し、土佐派と住吉派全体を通した特徴を指摘してみたい。

１）光起本と静嘉堂本

まず、14作品の中で一番場面一致率の高い光起本と静嘉堂本の関係について触れておこう。両者は54帖のうち実に50帖が同じ場面を描いている（率にして92.6％）。それも、巻54「夢浮橋」を除き、図様までほぼ一致している（図版１～４）。土佐光成は父光起が残した源氏絵画帖をほとんど写し取る形で静嘉堂本を完成させたと言えよう。粉本主義の面目躍如たるとこである。ただ、ここまで一致しているのに、なぜ４帖のみ（巻３「空蝉」・巻５「若紫」・巻７「紅葉賀」・巻53「手習」）は異なる場面を描いたのか、その理由に興味がわくが、本稿ではそこまでは立ち入らないことにする。

２）京博本と久保惣本

つぎに高率を示す光吉作になる京博本と久保惣本をみてみよう。両者の場面一致率は48帖中35帖、72.9％になる。さらに、京博本の光吉自身が描いた１帖～35帖までは27帖分が一致する（77.1％）。同一場面を描く図様をみると、色紙形態の違いから背景や従者の数などに相違はあるものの、主要なモチーフや登場人物の配置・しぐさなどは、光吉・長次郎問わず、ほぼ同様である。長次郎が担当した帖も久保惣本とほぼ図様が一致するのは、光吉の指示で長次郎が完成させたことによるのであろう。

両本の場面及び図様の一致率の高さは光吉という同一絵師による連続して制作された作品（慶長17～19年・1612～1614）であり、かつ久保惣本は80面からなる大作のため両本の場面一致率が高くなったと考えるのは容易である。しかし、光吉の構想の中でこの帖はこの場面と決まっていたようにも思われる。

久保惣本が一場面しか描かないのは30帖分であり、そこでの京博本との一致は19帖、63.3％と全体の率よりも10％ほど低くなる。この数字だけをみれば、久保惣本が１帖につき複数場面を描くため一致率も高くなったとの解釈も成り立つ。しかし、京博本のうち光吉自身が描いた35帖までで比較すると、久保惣本が一場面しか描かない22帖のうち17帖が京博本と同じ場面なのである（77.2％）。

当時の絵画制作、特に源氏絵制作においては、描写場面選択にあたっては担当絵師の意図よりも、注文主ないし仲介者の意思が大きな影響を与えていたといわれる。久保惣本と京博本では、前者の発注者は石川忠総という大名、後者は若い女性ないしその保護者がその女性のため[20]という性格の違いがある。しかし、両本において光吉が描いた帖の一致率が単一・複数帖いずれも全体を通した率よりも高いことは、発注者（仲介者）の意図に左右されず、光吉がこの帖ならこの場面とある程度決めていたことを示しているのではなかろうか。さらにいえば、逆に一致しない帖に発注者（仲介者）の制作意図が表れていると思われる。今この問題に立ち入ることはできないが、改めて考察してみたいと考えている。

３）徳川本とバーク本

では、やはり同一絵師による作品である土佐光則の二つの画帖、徳川本とバーク本の関係はどうであろうか。両本が同じ場面を描くのは９帖に過ぎない（16.7％）。そして、この９帖でも図様がほぼ同一なのは巻８・11・16・43・54の５帖に過ぎない。残る４帖は同じ場面を描きながらも、構図や時間経過に若干の差が読み取れる。例えば、巻18「松風」では、徳川本が源氏と幼い明石の姫君を抱いた乳母が立ち姿で、本文の「さりげなくまぎらはして立ちとまり給へる戸口に、乳母、若君抱きてさし出でたり」の部分を描いているが、バーク本では源氏と乳母が部屋の中に座っており、徳川本の直前の場面を描いていると思われる（図版５・６）。また、巻21「少女」の惟光が娘に届いた夕霧の文をみつけその兄を詰問する場面は、徳川本が「せうと逃げていくを」の場面らしく、兄がその場から立ち去ろうとしているのに対し、バーク本はその前後の「よからぬわざしけり」と「にくめば」ないし「呼び寄せて「誰がぞ」と問へば」のようで兄は惟光の前で手をつきかしこまっている（図版７・８）。このように光則は同じ場面を描いても微妙な時間差をつけて描き分けている。

光吉の２作品とは対称的に、光則の２作品は場面一致率自体も低く、さらに一致する場面でも図様が異なるのは、光則の作画姿勢に起因していると思われる。これまで、光則の画帖に対しては「光吉によって集大成された源氏絵図様に、新たなものを加えようとして積極的に創造力を発揮したことは確かである。」[21]（バーク本）、「場面選択のうち本画帖独自のものが…など多数を占める。…本画帖は時代を画した光則様「源氏物語画帖」の一典型と目してよいだろう。」[22]（徳川本）と、光則が独自の場面を創造していることが指摘されている。このことは表３をみれば明らかである。表３は各作品の描写場面が14作品中で類例のない場面ないし、１作品しか同じ場面を描かないものをまとめている。徳川本・バーク本とも両者あわせて60％内外の場面が土佐派の中では珍しい場面を描いている。特にバーク本では半数近い28場面が他の13作品と一致しない。さらに他の作品と同一場面であっても、微妙に図様が異なる帖がある。例えば、徳川本の巻２「帚木」はいわゆる「雨夜の品定め」で有名な源氏と頭中将ら４人が女性談義に花を咲かせる場面を描く。この４人が同じ部屋にいるのが普通の図様であるが（例えば久保惣本。図版９）、徳川本は源氏と頭中将がいる部屋に左馬頭と藤式部丞が訪れようとしている場面なのである。土佐派内部での選択場面の珍しさ、同じ場面でも微妙な時間設定の描き分けは、光則がそれまでの源氏絵の伝統にとらわれず、新しい場面を選択し、かつ新しい図様を完成させていったことを示している。そして、光則の源氏絵は次世代の基準作となっていった。

光則の子光起の作（光起本）と光起の子光成の静嘉堂本と光則２作品との場面一致率を個別にみると、30％をこえることはなく、それほど

場面を継承しているとは言えない。しかし、光起本は22帖が徳川本・バーク本いずれかの場面と一致している（巻11・16・21の３帖は３本とも同一場面）。図様でも、徳川本と光起本が一致する14帖中11帖で、光起は父光則の図様をほとんど写し取っている。バーク本と光起本との比較では（両本のみ一致するのは８帖）、徳川本ほど明確ではないが、光起は主要なモチーフは受け継いでいるようだ（図版10～14）。場面選択・その図様ともに、光起は父光則の残した源氏絵を基準作として自らの画帖を完成させたといえよう。先述したように光成は光起本をほとんど写し取って静嘉堂本を描いているので、その伝統は光成まで受け継がれていった。一方、光則の独自性を求める作画姿勢は、土佐派に流れる描写場面の継承に一石を投じる結果となったようである。

４）土佐派の傾向

表２で、室町時代の作品である浄土寺本・ハーバード本と近世源氏絵の祖型とされる光吉作２本の描写場面の一致率を制作順に眺めてみると、次のような点が指摘できる。４本とも東博本までは場面一致率が50％内外を示すものの、堺市博本とではいずれも約43％まで低くなる。そして、光則の２本とでは、浄土寺本と徳川本、京博本とバーク本を除き20％を切るほど低率になる。次世代の光起本・静嘉堂本では若干一致率は高くなるものの、堺市博本までの水準には戻っていない。一方、住吉派の如慶２作品では再び40％以上の一致率を示すようになる。この事実は次のことを物語っているように思われる。すなわち、室町時代の源氏絵とそれを受けて光吉により完成された桃山時代の源氏絵は光吉周辺の作品までは受け入れられていく。しかし、独自性を求める光則の登場によりその伝統は重要視されなくなり、土佐派の中では光則の作品が新しい基準作として確立した。一方、それまでの伝統は光則の活動時期に土佐派から分かれた住吉派に受け継がれていった、と。さらに付言すれば、土佐派の場面選択において室町時代及び光吉系統から明確に離れていくのは光則の時代からであるが、その萌芽は堺市博本から認められるのでないだろうか。土佐一得による東博本と先行する４本の場面一致率はハーバード本を除き、50％をこえる高率である。しかし、堺市博本では約43％にまで落ち込むのである。東博本・堺市博本とも残存する場面数が少ないためデーターの信頼性に不安は残るが、大まかな傾向としては正しいのではないだろうか。

場面選択・図様の両面で上記の傾向を最も端的にあらわしているのが、巻11「花散里」である。この帖は、ハーバード本を除き、浄土寺本から東博本までと住吉派３本が中川辺りで聞こえてきた琴の音に惹かれて源氏が惟光をその屋敷に入らせる場面（①場面）を描き、ハーバード本と堺市博本から静嘉堂本までは、源氏が麗景殿の女御と語らう場面（②場面）を描いている。土佐一得までの場面が光則以降には継承されず、住吉派に受け継がれており、先に指摘した傾向そのままなのである。そして、それぞれの図様は室町期の２作品ではなく、光吉の２本と堺市博本を祖型にして描き継がれている。

①場面の基本モチーフは門を入る惟光、室内で琴を弾く女房、飛び立つ時鳥、そして、門外で待つ源氏の乗った車である。この要素はすべての作品に共通するのであるが、浄土寺本とそれ以外を分けるのは、源氏の車描写である。浄土寺本以外はすべて車から顔をのぞかせる源氏を描いている（図版14・15）。この変化は明らかに光吉によるものであり、以後の作品は光吉の図様を継承していったのである。一方、②場面では、ハーバード本は源氏と語らうのは女性一人（麗景殿の女御か）で、源氏の視線もこの女性に注がれている。しかし、堺市博本では女性が二人となり、源氏の視線は屋外の景色に向けられているのである。そして、徳川本以降の作品はハーバード本ではなく堺市博本の図様をほぼそのまま踏襲している（図版16～18）。このように「花散里」では、表２の場面一致率から推測した土佐派における場面継承の傾向を図様の点からも確認できるのである。

本稿で指摘した「土佐派において、室町および桃山時代まで受け継がれた場面・図様が堺市博本の時代に変容し始め、光則の登場によって新たな源氏絵が創造されこれが新基準として継承される。一方、それまでの源氏絵は土佐派から分かれた住吉派に伝わる。」という法則で検討した全ての作品を解釈できないことは十分承知している。しかし、場面選択と図様の固定・定型化の中で、土佐派という流派の変容を探ろうとすれば、少々強引ではあるが、上記の変化は認められるのではなかろうか。

さいごに

かなりの紙数を費やした割にはまとまりを欠いた内容になってしまった。実は本稿の出発点は表１の作成であった。土佐派の源氏絵場面をまとめてみれば、なにかおもしろい発見があるのではないかとの、ほとんど思いつきで始めた研究である。それがたたって、この表をどう分析すればよいか、それだけで汲々としまい、解釈に筋が通らなかった点が多々ある。ただ数字だけで傾向を抽出するにはやはり限界がある。各作品同士の細かな図様解読を踏まえなければならないと痛感している。読者のご寛容を乞うとともに、今は表１が源氏絵研究者のみなさんの某かの参考になることを願うばかりである。

註

(1)『豪華［源氏絵］の世界　源氏物語』（1988年　学習研究社）

(2) 田口榮一氏「源氏絵の系譜－主題と変奏」（註(1)所収）

(3)『看聞御記』永享六年七月六日条

(4)千野香織・亀井若菜・池田忍「ハーヴァード大学美術館蔵「源氏物語画帖」をめぐる諸問題」（『国華』1222号　1997年）

(5)『京都国立博物館蔵　源氏物語画帖』（1997年　勉誠社）

(6)秋山光和『日本の美術119　源氏絵』（1971年　至文堂）

(7)『源氏物語手鑑研究』（1992年　和泉市久保惣記念美術館）

(8)図様はインターネットの東京国立博物館ホームページで閲覧した写真によった。

(9)図様は筆者が調査し、確認した。

(10)稲本万里子「堺市博物館蔵　源氏物語図色紙」（『国華』1223号　1997年）

(11)『江戸名作画帖全集Ⅴ　光則・光起・具慶』（1993年　駸々堂出版株式会社）

(12)『豪華[源氏絵]の世界　源氏物語』（1988年　学習研究社）

(13)『豪華[源氏絵]の世界　源氏物語』（1988年　学習研究社）

(14)『源氏物語古注集成10　源氏綱目付源氏絵詞』（1984年　桜楓社）

(15)『実用シリーズ　源氏物語』（1986年　学習研究社）

(16)『江戸名作画帖全集Ⅴ　光則・光起・具慶』（1993年駸々堂出版株式会社）

(17)註(1)に同

(18)註(1)に同

(19)註(2)に同

(20)稲本万里子氏「京都国立博物館保管「源氏物語画帖」に関する一考察」（『国華』1223号　1997年）

(21)註(1)所載の作品解説

(22)榊原悟氏「作品解説」（註(11)所収）

表１　源氏物語絵　土佐派作品別場面集成

凡例

１）本表は土佐派による源氏物語絵作品が各帖どの場面を描くかを集成したものである。

２）「新岩波大系」欄は各描写場面が『新日本古典文学大系　源氏物語』一～五（岩波書店）のどのページにあたるかを示す。（１－５は１巻５pの略）

３）「備考」欄は同一場面を描く各作品の構図や構成要素など図様の類似性や差異を略述した。

帖名	番号	描写場面概略	新岩波体系	浄土寺扇面本	土佐派 ハーバード画帖本	京博光吉画帖本	久保惣光吉画帖本	東博一得屏風本	堺市博色紙本	徳川光則画帖本	パーク光則画帖本	個人光起画帖本	静嘉堂光成絵詞本	住吉派 個人如慶画帖Ⅰ本	個人如慶画帖Ⅱ本	茶道具慶絵巻本	備考
1 桐壺	1	鴻臚館にて高麗の相人、源氏の顔相を見る。右大臣同伴する。	1－20			○	○	○			○	○	○		○		左右対称の違いはあるが、構図・人物配置等はほぼ共通。
	2	清涼殿東廂にて源氏元服の儀式。加冠役は左大臣。	24	○	○		○		○	○							ハーバード本・久保惣本・堺本はほぼ共通。
	3	左大臣、帝より加冠の禄を賜る。	25											○		○	茶道本未確認のため、比較できず。
2 帚木	1	五月雨の夜、源氏の宿所で頭中将らと理想の女性について談義（雨夜の品定め）。	1－36	○			○			○		○	○		○		徳川本以外はほぼ共通。徳川本は左馬頭・式部丞が歩いてくる。
	2	左馬頭がある殿上人に同行し女を訪ねると、その家では男が簧子で笛を吹いており、女は昔左馬頭が通っていた女であった。	51			○	○	○	○		○			○			京博本・久保惣本は共通。個屏・一得・パーク・如慶Ⅰ本は女性を描く点で共通。
	3	源氏、宿直所から左大臣邸に向かい、左大臣・葵の上と歓談する。	61								○						類例がほとんど知られていない場面。
	4	源氏、方違えで紀伊守邸に赴き、歓待される。	62													○	類例がほとんど知られていない場面。
	5	紀伊守邸に泊まった源氏、空蟬の部屋を窺う。従者たちはうたた寝。	66		○												他の作例は源氏が部屋を窺う場面。ハーバード本はまさに密会の場面。
	6	一夜を過ごした源氏、夜明けに空蟬を障子口まで送る。	70							○							類例がほとんど知られていない場面。
3 空蟬	1	源氏、小君の手引きで紀伊守邸に忍び、空蟬と軒端荻が碁を打つ姿を覗き見る。	1－86	○	○	○		○					○	○	○		碁を打つ二人と小君が基本。京博本は小君なし。浄土寺・静嘉堂本は女性３人に小君。
	2	源氏、空蟬と軒端荻が共寝する部屋に忍び入る。	89							○		○					構図・人物配置いずれも同一。
	3	源氏の気配を感じ取った空蟬、単衣のみで部屋から逃げ出す。	89～90				○										類例がほとんど知られていない場面。
	4	部屋から出た源氏、近くで寝ていた小君を起こす。	91								○						類例がほとんど知られていない場面。
	5	軒端荻と一夜を過ごした源氏、空蟬の脱ぎ捨てた衣をとって部屋を出る。	91													○	類例がほとんど知られていない場面。
4 夕顔	1	乳母を見舞う源氏、隣家の垣根に咲く夕顔を従者に手折らせる。と、内より童女が花を載せるための扇を差し出す。	1－101	○			○	○			○			○	○		構成要素は共通するが、人物配置に違いがある。
	2	源氏、帰宅後扇を見ると、歌が書かれている。	103													○	類例がほとんど知られていない場面。
	3	六条御息所邸での朝、源氏、見送りの中将の君と歌を交わす。庭では童女が朝顔を摘んでいる。	110	○		○	○		○	○							構成要素は共通するが、京博本と久保惣本、京博本②と徳川本がそれぞれ近似。
	4	八月十五夜、源氏、夕顔宅に泊まる。翌朝、砧や老婆の声が聞こえてくる。	117～18		○						○	○					光起本と静嘉堂本はほぼ共通。
5 若紫	1	源氏、付近を散策しながら、従者から諸国名勝や明石入道の話を聞く。	1－154～56													○	他の作例は出光美・扇面貼付屏風程度。
	2	源氏、北山の僧都の坊で、逃げた雀を追って縁先に出てきた美少女・若紫を垣間見る。	157～58	○	○	○							○		○		如慶Ⅱ本以外は構図・要素など図様はほぼ共通。
	3	源氏、僧都を訪ね、若紫の素性を聞き出す。	161											○			他にフリア美・光則白描画帖が同一場面。
	4	源氏、思い悩み眠れず、滝の音も強くなったように聞こえる。	164				○				○						図様はほぼ同一。
	5	眠れない源氏、屏風を少し開け、扇をならすと、侍女がいざり出る。	164							○							類例がほとんど知られていない場面。「絵入源氏物語」（承応版）にあり。
	6	都へ帰る源氏、僧都や迎えの左大臣の息子らと桜散る山中で酒宴を開く。	170	○													他に国宝絵巻、探幽五十四帖屏風などあり、伝統的な絵画場面。
	7	源氏、帰京した北山の尼君を見舞う。若紫がなぜ会わないのかと騒ぐ。	181								○						国宝絵巻に詞書のみのこるが、作例はほとんどなし。
	8	尼君の死後、邸を訪ねた源氏、若紫を膝の上で寝かせようとする。	185							○							類例がほとんど知られていない場面。
	9	源氏、二条院で若紫と手習いや雛遊びなどをして過ごす。	196									○					他に東博・伝光則白描色紙屏風が同一場面。
6 末摘花	1	春の朧月夜、源氏、故常陸宮邸を訪ね、姫君（末摘花）が弾く琴の音を聞く。	1－207								○						他に天理・絵巻が同一場面。
	2	源氏、その場を離れようとすると、身をやつした姿の頭中将と出会う。	209			○	○	○						○	○		図様はほぼ同一。特に、光吉・如慶の各２本はそれぞれほとんど同一。
	3	その帰り、二人は同じ車に乗り、笛を合奏しながら左大臣邸に向かう。	209													○	他に個人・光起扇面が同一場面。
	4	冬の夜、源氏が末摘花邸を訪ね、格子を叩くと、女房が灯りを取って招き入れる。	223							○		○	○				図様はほぼ同一。
	5	帰り際、源氏、庭の橘に積もった雪を従者に払わせる。	226		○		○										源氏は立ち姿が通例であるが、ハーバード本は末摘花の部屋に座る。
7 紅葉賀	1	朱雀院行幸の日、源氏、頭中将と青海波を舞い、絶賛される。	1－242		○				○						○	○	図様はほぼ同一。特に堺本と如慶Ⅱ本は近似する。
	2	元旦、源氏、参内の前に若紫の部屋に立ち寄ると、雛遊びに熱中している。	247			○	○			○			○				京博本と久保惣本はほぼ同一の図様。
	3	琴の後、灯りをともして絵を一緒に見る。	255								○						類例がほとんど知られていない場面。
	4	源氏、温明殿辺りを歩いていると、源典侍が琵琶を弾いており、これと戯れる。	261									○		○			図様はほぼ同一。
8 花宴	1	桜花の宴の後、源氏、弘徽殿の細殿で、扇をかざして歌を口ずさみながら歩いてくる女性（朧月夜の君）に出遭う。	1－276			○					○	○			○		如慶Ⅱ本以外はほぼ図様は同一。如慶Ⅱ本は二人が接近。
	2	翌朝、二人は歌を読み交わし、あわただしく扇を交換しただけで別れる。	277～78											○			個屏本は部屋の中、如慶Ⅰ本は廊下で扇を交わす。
	3	大君姿の源氏、女一宮たちの部屋に上半身を入れ、朧月夜の君を探し当て、几帳ごしに手を取り、歌を交わす。	283		○		○			○	○					○	図様はほぼ同一。
9 葵	1	新斎院の御禊行列見物で、葵の上一行と六条御息所一行が場所取り争い。	1－294		○	○	○		○	○				○	○	○	図様はほぼ同一。
	2	髪削ぎのあと、若紫、「千尋とも…」との歌を紙に書き付ける。	298								○						類例がほとんど知られていない場面。
	3	源氏、庭の竜胆と撫子を折らせ歌をつけて、葵の上の母大宮に贈る。	319									○	○				図様はほぼ同一。
10 賢木	1	晩秋、源氏、伊勢に下る予定の六条御息所を野宮に訪ね、榊の枝を御簾の中に入れ歌を交わす。	1－345	○	○	○	○	○	○	○				○	○		同一場面であるが、源氏の動きに時間差あり。
	2	源氏、藤壺に迫る。藤壺突然様態が悪化し、源氏塗籠の部屋に隠れる。	360	○?													詞書からの場面比定。
	3	源氏、雲林院近くの斎院にいる朝顔の姫に、榊に木綿をつけて歌を贈る。	368								○	○					図様はほぼ同一。
	4	藤壺、源氏から贈られた雲林院の紅葉を瓶に入れ、廂の柱に遠ざける。	371													○	他にフリア美・光則白描画帖が同一場面。
	5	法華八講最後の日、藤壺出家。源氏、命婦を介して悲しみを訴える。	377～78							○							類例がほとんど知られていない場面。
11	1	源氏、中川辺りで聞こえてきた琴の音に惹かれて、惟光を入らす。門前の桂から時鳥が一声鳴いて飛び立つ。	1－396	○		○	○	○						○	○	○	浄土寺本・茶道本以外はほぼ図様同一。
	2	源氏、花散里姉妹を訪ね、姉麗景殿の女御の部屋で昔話。外には廿日の月が出て、橘が咲き、時鳥が鳴いている。	397		○			○	○	○	○	○					ハーバード本以外はほぼ図様同一。
12 須磨	1	源氏、須磨へ下向する暇乞いのため左大臣邸を訪問。夕霧、膝に乗る。	2－6～8								○						類例ほとんどなし。
	2	源氏、召人中納言の君の部屋に泊まり、帰り際高欄にもたれ庭の桜を眺める。	9～10							○		○	○				図様はほぼ同一。
	3	源氏、身繕いで鏡に向かい、容貌のやつれに感慨をもらす。紫の上も涙。	12						○								他に東博・伝光則白描色紙屏風が同一場面。
	4	秋の夜、源氏一人起きて、琴を弾き歌う。惟光なども起きてきて涙する。	31								○						他にフリア美・光則白描画帖、根津・光則画帖が同一場面。
	5	夕暮れ、源氏、海の見える廊下に出て、庭の秋草、沖行く船や雁の列を眺める。	32				○	○							○		図様はほぼ同一。
	6	大宰大弐一行が須磨沖を通ると、源氏の琴の音が微かに聞こえ、文を出す。	34		○									○			ハーバード本は一行の船が大きく、主題がここにあるようだ。
	7	雪の降る日、源氏琴を弾き、良清に歌わせ、惟光に笛を吹かせて遊ぶ。	38							○							他に根津・伝光元画帖が同一場面。
	8	新春、去年植えた桜の若木を眺め、都の春を偲ぶ。頭中将来訪。	41			○	○										図様はほとんど同一。
	9	源氏と頭中将、山荘の馬が稲を喰う様子を珍しく眺める。	42	○												○	他に永青・扇面屏風、個人扇面なども同一場面。

帖名	番号	描写場面概略	新岩波体系	浄土寺扇面本	土佐派 ハーバード画帖本	京博光吉画帖本	久保惣光吉画帖本	東博一得屏風本	堺市博色紙本	徳川光則画帖本	バーク光則画帖本	個人光起画帖本	静嘉堂光成絵詞本	住吉派 個人如慶画帖Ⅰ本	個人如慶画帖Ⅱ本	茶道具慶絵巻本	備考
13明石	1	明石入道が船で源氏を迎えに来る。良清が浜まで出向く。	2 −58								○						類例ほとんどなし。
	2	四月のある夜、入道、源氏を自邸に招き、琵琶と琴を合奏する。	65			○	○			○		○	○			○	京博本と久保惣本、残る３本はそれぞれほぼ同一の図様。
	3	八月十三夜、源氏、初めて明石の君のもとへ通うべく、馬に乗り、入り江つたいに進む。	75〜76	○	○			○	○					○	○		モチーフとして明石の君館の有無に差がある。
	4	源氏、京への暇乞いに明石の君を訪問。琴を弾くと、入道が君に琴を差し入れる。	83								○						他に根津・光則画帖が同一場面。
	5	明石の君、源氏の琴に合わせて、その琴を弾く。	83〜84	○													他に個人・扇面（室町）が同一場面。
14澪標	1	明石の君、源氏が姫の五十日祝いに贈った文を乳母とともに読み語る。	2 −107								○						類例がほとんど知られていない場面。
	2	明石の君からの文を繰り返し読む源氏、恨み顔の紫の上に上包みを見せる。	108									○	○				図様はほとんど同一。
	3	五月、源氏、花散里を訪問。間近で鳴く水鶏を聞いて、歌を読み交わす。	109				○	○							○	○	構成要素はほぼ共通。
	4	秋、源氏住吉詣で。鉢合わせした明石の君一行は気後れし、そのまま去る。	112〜14			○	○							○			構成要素はほぼ共通。
	5	翌日、源氏、難波で明石の君一行と出会う。歌を口ずさむと、惟光が筆と硯を奉る。	115〜16	○													構成要素はほぼ共通。
	6	病床の六条御息所、姫斎宮を源氏に託す。源氏、几帳の隙間から宮を見る。	118〜20							○							類例ほとんどなし。「絵詞」にほぼ忠実。
15蓬生	1	末摘花邸、手入れもできず、狐の棲家にまで荒廃する。	2 −133													○	類例がほとんど知られていない場面。
	2	大宰府に下る末摘花の伯母、邸南面に無作法に車を寄せ、ともに参ろうと誘う。	141〜44								○						類例がほとんど知られていない場面。
	3	源氏、花散里邸への途中、荒れ果てた末摘花邸に気付き、惟光に内を窺わせる。	146							○		○	○	○			如慶Ⅰ本以外は図様はほぼ同一。
	4	源氏、末摘花邸の蓬が生い茂った庭を、惟光に露を払わせながら進む。	149	○	○	○	○								○		構成要素はほぼ共通。特に京博本と久保惣本は近似する。
	5	源氏、再会した末摘花と「松」によせて歌を詠み交わす。	151			長											類例がほとんど知られていない場面。
16	1	石山寺詣での源氏、逢坂の関で上京途中の空蟬一行と出会う。空蟬らは車を木陰に入れ、道を譲り、源氏の行列を見送る。	2 −159		○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	構成要素はほぼ共通。
17絵合	1	絵好きの冷泉帝、絵をよくする梅壺の局に足繁く通い、自ら絵筆を取る。	2 −173									○	○				図様はほぼ同一。
	2	源氏、絵合わせのための絵を選び、紫の上に須磨の絵日記を見せる。	174	○	○											○	構成要素はほぼ共通。
	3	藤壺、女房を左右方に分け、絵の優劣を論じさせる。	175〜77							○							他に根津・光則画帖が同一場面。
	4	冷泉帝御前での絵合わせ。左右方、それぞれ揃いの衣装で居並ぶ。藤壺、源氏、権中納言（頭中将）も出席。	180〜81			○	○		○		○			○	○		如慶Ⅰ本以外は図様はほぼ同一。
18松風	1	明石の上母子、船で上京。入道は屋敷で見送る。	2 −197													○	類例ほとんどなし。
	2	大堰の山荘で暮らす明石の上。源氏の形見の琴を弾くと、松風が音を合わせる。	198									○	○	○			光起本と静嘉堂本はほとんど同一。
	3	源氏、ようやく大堰山荘の明石の上を訪問。初めて姫と対面する。	199〜200	○													他にサントリー美・如慶画帖が同一場面。
	4	二条院に帰る源氏を乳母が姫を抱いて見送る。明石の上は几帳の陰で臥す。	203〜04							○	○						同じ光則画帖であるが、構図は異なる。
	5	帰る途中、源氏、桂殿で遊宴。狩で遅れた人々が荻の小枝に小鳥をつけて奉る。	2 −206	○	○	○	○								○		京博本と久保惣本はほとんど同一。
	6	二条院に戻った源氏、明石の上からの文を紫の上に見せ、脇息にもたれ物思う。	209						○								類例ほとんどなし。
19薄雲	1	別れの時。明石の上は姫を抱き、同行する乳母らが守り刀などを車に運ぶ。	2 −221	○?	○		○							○	○	○	住吉派３本は構成要素が一致。浄土寺本は「東屋」場面ヵ。
	2	源氏が大堰への出掛けに紫の上の部屋に寄ると、姫が裾にまとわりつく。	225	○				○	○								一得本と堺本の図様はほぼ同一。
	3	源氏、二条院に里帰りした梅壺女御と几帳を隔てて語り合う。庭には秋草。	240							○		○	○				光起本と静嘉堂本の図様はほとんど同一。
	4	源氏、明石の上を訪ね、鵜飼舟の浮かぶ大堰川を眺めながら、上を慰める。	245〜46			○	○				○						京博本と久保惣本の図様はほぼ同一。
20朝顔	1	朝顔姫邸から帰った源氏、庭に咲き残った朝顔に歌を添え、姫に贈る。	2 −257							○		○	○				３本とも図様はほぼ同一。
	2	源氏の文に返事を書くよう侍女たちが硯を進め、朝顔の姫、筆をとる。	257	○							○						３本とも構成要素はほぼ同一。
	3	源氏、朝顔姫邸を訪問。老門番が鍵を開けられず、うろたえる。	261				○							○			構成要素はほぼ同一。
	4	源氏と紫の上、雪が積もった庭に童女を降ろし、雪転がしに興じる様子を眺める。	268	○	○	○		○	○						○	○	図様はほぼ同一。特にハーバード本と京博本が近似。
21少女	1	雲居雁に逢えない夕霧、部屋の前でたたずんでいると、雲居雁の独り言が聞こえてくる。	2 −301						○						○		図様はほぼ同一。
	2	源氏、五節の舞姫となる惟光娘に付ける童女を選ぶため、御前に渡らせる。	309													○	類例がほとんど知られていない場面。
	3	夕霧、惟光娘への文をその兄に託す。兄妹で読んでいると、父惟光に見つかる。	314							○	○	○	○				バーク本以外、図様はほぼ同一。
	4	六条院にて、秋の御殿の秋好中宮、春の御殿に住む紫の上に紅葉を箱の蓋に乗せ贈る。	325	○	○	○	○							○			図様はほぼ同一。特に京博本と久保惣本は近似。
22玉鬘	1	玉鬘一行、初瀬詣。偶然宿で夕顔の元侍女右近に出会う。	2 −347〜49		○		○							○	○	○	ハーバード本以外図様はほぼ同一。特に久保惣本と如慶Ⅰ本が近似。
	2	参詣の後、玉鬘と右近、高台の宿坊で語らい、歌を詠み交わす。	354								○						図様はほぼ同一。
	3	六条院西の対に引き取られた玉鬘を源氏が初めて訪問。右近が迎える。	363〜64							○							類例がほとんど知られていない場面。
	4	源氏、几帳をおしやり初めて玉鬘を見る。右近、灯心をかきあげ近くに寄せる。	364	○								○	○				構成要素はほぼ同一。光起本と静嘉堂本は図様近似。
	5	年末、源氏と紫の上、婦人たちに贈る衣装を選び整える。	367〜68			○	○	○	○								図様はほぼ同一。
23初音	1	六条院での初めての正月、源氏、紫の上の御殿で姫君の歯固め祝いをする。	2 −378				○										他に宮内庁・探幽五十四帖屏風が同一場面。
	2	源氏が明石の姫君を訪ねると、明石の上から文と贈り物が届いていた。庭では童女たちが小松を引いている。	380	○		○					○				○		構成要素は同一であるが、構図はそれぞれ異なる。
	3	源氏、明石の上の部屋に行き、琴の近くに手習いの反故をみつけ、筆をとる。	383		○			○	○	○		○	○	○			ハーバード本以外は構成要素同一。光起本・徳川本・静嘉堂本は図様一致。
	4	男踏歌の翌日、源氏、数々の琴を取り出し、後宴を開こうと考える。	391〜92													○	類例がほとんど知られていない場面。
24胡蝶	1	三月二十日頃、紫の上、春の御殿で池に竜頭鷁首の舟を浮かべて、船楽を催す。	2 −400〜01		○				○					○			構成要素は同一であるが、構図はそれぞれ異なる。
	2	秋好中宮主催の仏事に、紫の上、蝶と鳥の衣装の童女を遣わし、山吹と桜を贈る。	404〜05			○	○								○		京博本と久保惣本は図様がほぼ同一。
	3	源氏、玉鬘に届いた結ばれたままの文をみつけ、誰のものか侍女右近に問う。	408	○						○							構成要素は同一であるが、構図はそれぞれ異なる。
	4	源氏、玉鬘のもとから帰る際、庭の呉竹に寄せた歌を詠みかける。玉鬘も唱和する。	413								○					○	同一場面であるが要素・構図とも一致しない。
	5	雨上がりの夕刻、源氏、玉鬘を訪ね、橘の実を玩びながら、求愛の歌を詠む。	415	○								○	○				光起本と静嘉堂本は図様が同一。
25蛍	1	蛍兵部卿宮、玉鬘訪問。源氏、几帳の帷子を上げ、蛍の光で玉鬘の姿をみせる。	2 −429			○	○					○	○	○	○		光吉の２本、光起本と静嘉堂本、如慶の２本がそれぞれ図様近似。
	2	玉鬘に蛍兵部卿宮から菖蒲に結んで文が届く。源氏、返事を書くように勧める。	433	○					○	○							構成要素は共通であるが、構図は異なる。
	3	六条院の馬場で、騎射が開かれ、大勢の貴顕が見物。	435		○		○		○								要素・構図ともほぼ共通。
	4	源氏、物語に夢中の玉鬘にその本質を論じながら、思慕の心を訴える。	440													○	類例がほとんど知られていない場面。
26常夏	1	酷暑のある日、源氏、六条院東釣殿で納涼。川魚などを料理させ、内大臣の子息らと歓談する。	3 − 1	○	○	○	○								○		京博本と久保惣本は同一。ただし、浄土寺本にある炉がない。
	2	夕方、源氏、貴公子らと西対の玉鬘の元へ。庭に撫子が咲き乱れている。	7							○							類例がほとんど知られていない場面。
	3	暑い日、雲居雁がうたた寝する姿を父内大臣がみつけ、これを叱る。	15〜16						○		○	○	○	○			如慶Ⅰ本以外は構図も含めほとんど同一の図様。
	4	内大臣、近江の君と侍女が双六に興じるようすを覗き見する。	18													○	他に宮内庁・探幽五十四帖屏風が同一場面。
27篝火	1	秋の夕方、源氏、琴を枕に玉鬘と添い寝し、水辺で燃え盛る篝火に寄せて歌を詠み交わす。	3 −30〜31	○	○	○	○	○			○	○	○	○	○		構成要素は共通であるが、構図はそれぞれ異なる。
	2	源氏が帰ろうとすると、花散里の東対から夕霧や柏木らの合奏が聞こえてくる。	31													○	類例がほとんど知られていない場面。
	3	源氏、夕霧らを玉鬘方へ呼び寄せ、合奏。玉鬘は御簾の奥でこれを聞く。	31〜32	○						○							両者の間には時間の差がある。
28野分	1	夕霧、野分で吹き上げられた御簾の隙間から紫の上を垣間見る。	3 −37		○						○					○	要素・構図ともほぼ共通。
	2	翌朝、夕霧が父源氏の命で、秋好中宮を見舞うと、童女たちが庭に降りて、虫籠に露を含ませていた。	43	○		○	○	○	○					○	○		京博本・久保惣本・堺本は近似するが、同一ではない。
	3	夕霧、源氏と玉鬘が睦まじく戯れている姿を覗き見る。	47							○		○	○				構図もほとんど同一。
	4	夕霧、明石の姫君の元で女房から料紙をもらい、雲居雁と惟光娘に文を書く。	50	○													室町期の個人・扇面、永青文庫・扇面がおなじ場面。
	5	夕霧、明石の姫君を垣間見る。	51								○						類例がほとんど知られていない場面。

帖名	番号	描写場面概略	新岩波体系
29行幸	1	十二月、冷泉帝、大原野に行幸。帝の鳳輦に多数の貴族が供奉。	3 －58～59
	2	行幸不参の源氏に、帝より雉一対が贈られる。	61
	3	行幸の翌日、源氏、手紙で玉鬘に帝への宮仕えを勧める。玉鬘も返歌。	61～62
	4	源氏、病気の大宮を見舞い、玉鬘の一件を打ち明け、内大臣への仲介を依頼する。	64～68
	5	源氏、玉鬘の裳着に、末摘花から届いた祝いの品と歌を見て、赤面する。	77
30藤袴	1	夕霧、源氏の命で帝の仰せを伝えるため、玉鬘を訪ねる。手には藤袴の花。	3 －91
	2	夕霧、藤袴を御簾の下から差し入れ、玉鬘に求愛する。	93～94
	3	玉鬘、諸方より届く文を読もうともしない。そこへ蛍兵部卿宮からの文が届く。	103
31真木柱	1	源氏、不本意にも鬚黒大将の妻となった玉鬘を訪ね、歌を交わす。	3 －113
	2	玉鬘を訪ねようと気もそぞろな鬚黒大将。北の方が衣装に香を焚き染める。	120
	3	大将の身繕いを終えた北の方、突然大将に火取りを投げつける。	121
	4	離別する北の方とともに屋敷を去る姫、歌を書いた紙を柱の割れ目に差し込む。	127
	5	三月、源氏、玉鬘のいた西の対に渡り、玉鬘を想って嘆く。	142
32梅枝	1	二月十日、蛍兵部卿宮、来訪。折りしも、朝顔の斎院より、松と梅の枝が添えられた紺と白の瑠璃壷に入れた薫物が届けられた。	3 －154
	2	源氏、朝顔の斎院への返事に付けるため、庭の梅枝を手折らせる。	154
	3	明け方、帰る蛍兵部卿宮に、源氏、直衣と薫物を贈る。	158
	4	明石の姫君入内のため、源氏、寝殿で草子を書く。墨をする女房たち。	162
	5	蛍兵部卿宮、依頼されていた草子が完成し、六条院に持参する。	163
33藤裏葉	1	内大臣、宴で杯に藤の花を添え、夕霧に雲居雁を許す歌を詠む。	3 －181～82
	2	夕霧より雲居雁に届いた後朝の文を、内大臣が読む。	184
	3	夕霧夫妻、故大宮ゆかりの三条殿に転居。往時を回顧し、歌を詠み交わす。	194
	4	そこへ、宮中から退出した父太政大臣が訪問。夕霧の乳母と唱和。	195
	5	冷泉帝、六条院に行幸。源氏、渡殿に錦を敷き詰め、鵜飼船を浮かべて歓待。	195～97
34若菜上	1	正月子の日、玉鬘、若菜を献じて源氏四十の賀を祝う。二人の息子も同席。	3 －235～36
	2	女三宮降嫁が不愉快な紫の上、硯を引き寄せ嘆きの歌を詠む。源氏、唱和す。	241
	3	紫の上の夢を見た源氏、雪の夜中、上の元へ帰る。女房たち格子を開けない。	244
	4	雪の朝、源氏、梅の枝に文をつけ、女三宮に贈る。	245
	5	朧月夜との再会を果たした源氏、帰り際、藤を手折らせ歌を詠む。庭に網代車。	255
	6	三月十日あまり、明石の女御、無事男子出産。	273
	7	三月、六条院で蹴鞠の遊び。御簾の隙からこれを見ていた女三宮、偶然猫が飛び出し、隙間からその姿を柏木に見られてしまう。	295～96
35若菜下	1	東宮、柏木より女三宮の愛猫の話を聞き、これを手に入れ、柏木に見せる。	3 －313
	2	柏木、女三宮の愛猫を東宮より預かり、愛玩する。	313～14
	3	正月二十日、六条院で女性ら管弦の遊び。源氏、夕霧も加わる。	335
	4	源氏と病後の紫の上、二条院の蓮の花を眺めながら唱和する。	378
	5	小侍従が柏木の文を女三宮に見せているところへ、源氏が戻ってくる。	380
	6	翌朝、扇を取りに戻った源氏、褥の下から柏木の文を発見する。	382
	7	十二月、六条院で朱雀院御賀の試楽が催される。	402～03
36柏木	1	①柏木病のため、父到仕大臣、行者を呼び祈祷させ、語らう。 ②柏木、その隣室に小侍従を呼び入れ、女三宮からの返書を読む。	4 － 7 ～9
	2	夕霧、柏木の妻落葉宮を見舞い、母御息所と語り、しばしば鼻をかむ。	34
	3	夕霧、母御息所と唱和して、一条宮をあとにする。	36～37
	4	夕霧、一条宮を再訪し、落葉宮にもっと馴れ親しみたいとの歌を詠みかける。	40
37横笛	1	朱雀院、女三宮に筍・野老に文を添えて贈る。源氏、これを読む。	4 －49
	2	源氏、幼い薫が筍を口に入れたり投げたりし遊ぶ姿を見て、笑いたしなめる。	52
	3	源氏、薫を膝に乗せ、話し掛け、戯れに歌を詠む。	52
	4	夕霧、退出際に、御息所より柏木遺愛の横笛を贈られ、少しこれを吹く。	56～55
	5	夕霧の夢枕に柏木が立ち、笛は別人に贈るつもりであったと告げる。	58
38鈴虫	1	源氏、準備に不手際な女房たちを諫める。	4 －71
	2	源氏、蓮の花にかけた歌を扇に書いて、女三宮に詠みかける。	72
	3	そこへ源氏が渡る。女三宮と鈴虫に寄せて唱和し、琴を弾く。	76
	4	すると、蛍兵部卿宮、夕霧、殿上人らが集い、管弦の遊びとなる。	77
39夕霧	1	八月二十日頃、夕霧、落葉宮母子が引越しした小野の山荘を訪れる。	4 －91
	2	泊まる決心をした夕霧、随身たちを栗栖野の荘に帰す。	95
	3	夕霧、落葉宮の部屋に入り、逃れようとする宮の裾を捉えて、思いを告げる。	96
	4	雲居雁、御息所からの返書を読む夕霧に背後から近づき、これを奪う。	111
	5	九月十日余り、夕霧、意を決して小野の山荘を訪ねる。妻戸に立ち、夕日に扇をかざす。垣根の外では鹿が鳴いている。	127
	6	蔵人少将、父到仕大臣の使いとして、文を落葉宮に届ける。	154
40御法	1	紫の上、死に臨んでの気持ちを認めた文を匂宮に届ける。明石中宮、それに返歌。	4 －165
	2	紫の上、法要において、桜の下で舞われる陵王の舞を感慨深く眺める。	165
	3	夏、紫の上、見舞いに来た匂宮に庭の梅と桜を慈しんでくれるよう遺言する。	169
41幻	1	紫の上遺愛の桜を散らすまいとする匂宮の無邪気さに、源氏慰められる。	4 －192
	2	源氏、六条院の女三宮に渡る。匂宮と薫が戯れ、三宮は仏間で読経する。	193
	3	夏の日、源氏、池の蓮を眺め涼をとりながら、紫の上を偲ぶ歌を詠む。	201
	4	源氏、紫の上の残した文を読んで泣き、歌を書き付けてすべて燃やしてしまう。	205
	5	源氏、年末の御仏名会に招いた馴染みの導師をねぎらい、過ぎし方を語り合う。	205～06
42匂宮	1	夕霧主催の賭弓還饗のため、匂宮・薫ら牛車を連ね、六条院に向かう。	4 －223～24
	2	六条院で夕霧主催の賭弓還饗。女房ら物陰より覗き見る。	224

浄土寺扇面本	土佐派 ハーバード画帖本	京博光吉画帖本	久保惣光吉画帖本	東博一得屏風本	堺市博色紙本	徳川光則画帖本	バーク光則画帖本	個人光起画帖本	静嘉堂光成絵詞本	住吉派 個人如慶画帖Ⅰ本	個人如慶画帖Ⅱ本	茶道具慶絵巻本	備考
	○		○							○	○	○	ハーバード本以外は同一場面であるが、構成要素が若干異なる。
○		○	○	○	○								堺本と一得本はほぼ同一の図様。
						○							類例がほとんど知られていない場面。
								○	○				両者、同一の図様。
							○						類例がほとんど知られていない場面。
			○		○			○	○			○	茶道本以外はほぼ同一の図様。
	○	○		○			○			○	○		要素は共通であるが、構図は若干異なる。
						○							類例がほとんど知られていない場面。
					○						○		構図・要素とも若干異なる。
								○	○				ほとんど同一の図様。
○	○	○	○				○						京博本と久保惣本は図様が近似。
○										○			要素、構図とも異なる。
						○						○	要素、構図とも異なる。
	○							○	○	○			光起本と静嘉堂本はほぼ同一図様。如慶Ⅰ本もこれに近似。
						○							類例がほとんど知られていない場面。
○		○	○		○						○		京博本・久保惣本・堺本はほぼ同一の図様。
○												○	構成要素は共通。
							○						類例がほとんど知られていない場面。
	○	○	○							○	○		要素はほぼ共通であるが、構図は若干異なる。
						○							類例がほとんど知られていない場面。
							○						類例がほとんど知られていない場面。
					○			○	○				ほとんど同一の図様。
												○	類例がほとんど知られていない場面。
			○										他に個人・氏信五十四帖屏風が同一場面。
						○		○	○				三者とも図様はほぼ同一。
							○						他に個人・白描屏風が同一場面。
○													他にフリア・光則白描画帖など江戸時代の作品に数点類例あり。
										○		○	構図・要素とも異なる。
			○										他に徳川美・詞書伝秀忠画帖が同一場面。
○	○	○			○						○		ハーバード本と京博本は視点が女三宮の部屋にあり、独特。他の構図はほぼ同一。
							○						類例がほとんど知られていない場面。
		○								○	○		如慶Ⅰ・Ⅱ本の図様はほぼ同一。
			○										構図・要素とともほぼ共通。
	○							○	○				光起本と静嘉堂本はほぼ同一図様。ハーバード本は若干異なる。
						○							類例がほとんど知られていない場面。
○												○	構図・要素とも異なる。
			○										類例がほとんど知られていない場面。
①②		①	①		①②		①②	②	②	①②	①	①②	堺本と如慶Ⅰ本は人物配置が類似。光起本と静嘉堂本は同一
						○							類例がほとんど知られていない場面。
			○										類例がほとんど知られていない場面。
	○												類例がほとんど知られていない場面。
○						○							両者の場面には時間差がある。浄土寺本が絵詞と同一場面
	○	○	○					○	○		○		京博本と久保惣本は同一で左右対称。光起本・静嘉堂本・如慶Ⅱ本は類似
							○						類例がほとんど知られていない場面。
○										○		○	いずれも、構成要素は共通であるが、人物配置が異なる。
			○										他に伝光則色紙貼交屏風などに若干の類例がある。
							○						絵詞とほぼ同一場面
		○						○	○	○			いずれも、構図・要素ともほぼ同一
○			○								○	○	いずれも、構図・要素ともほぼ同一
	○					○							要素・構図とも若干異なる。
○													類例がほとんど知られていない場面。
			○										類例がほとんど知られていない場面。
						○							類例がほとんど知られていない場面。絵詞にほぼ忠実。
							○	○	○			○	茶道本以外はほぼ同一図様。
○	○	○		○						○	○		いずれもほぼ同一図様。ただし、浄土寺本と如慶Ⅰ本は落葉宮を描き込む。
			○										類例がほとんど知られていない場面。
			○										類例がほとんど知られていない場面。
○	○	○					○	○	○		○	○	ハーバード本・浄土寺本以外はほぼ同一図様。
						○				○			要素はほぼ同一。構図は若干異なる。
						○							他に伝光元画帖、狩野雪信画帖が同じ場面。
			○										類例がほとんど知られていない場面。
○													類例がほとんど知られていない場面。
		○					○	○	○		○	○	いずれもほぼ同一図様。特に光起本・バーク本・静嘉堂本は同一図様
○	○									○		○	要素はほぼ共通。構図は異なる。
	○	○	○			○				○	○	○	要素はほぼ同一。
							○	○	○				いずれもほぼ同一の図様。

帖名	番号	描写場面概略	新岩波体系
43紅梅	1	到仕大臣の次男按察大納言の姫大君、東宮へ入内する。	4 －233
	2	按察大納言、参内する若君に笛の稽古をさせる。宮の御方にも琵琶を勧める。	237～38
	3	大納言、紅梅の枝に文を付けて、匂宮に届けるよう若君に申し付ける。	238
	4	若君、明石中宮のもとにいた匂宮に文と紅梅の枝を届ける。	239
44竹河	1	同日夕刻、薫も玉鬘邸を訪問。女房宰相君と歌を詠み交わす。	4 －259
	2	正月二十日頃、薫、玉鬘邸に藤侍従を訪ねる。と、夕霧息・蔵人少将と会う。	260
	3	玉鬘の姫たち、桜を賭けて碁を打つ。蔵人少将、これを覗き見る。	266～68
	4	薫、藤侍従と冷泉院の庭にて、松にかかる藤を眺める。	276
45橋姫	1	八宮、姫君たちに手習いさせる。	4 －302～03
	2	八宮、姫君たちに琵琶や琴を教える。	303
	3	9月、薫、馬で宇治の八宮邸を訪ねる。	312
	4	薫、有明の月夜、八宮の中君が琵琶の撥で月を招き、大君が琴に寄りかかりながら、笑う姿を覗き見る。	314
	5	薫改めて案内を乞い、姫君たちの御簾の前に座り、挨拶を交わす。	316～17
	6	薫、帰ろうとすると、供人が宇治川を下る船を見て騒いでいる。	322
	7	十月、薫、八宮を訪ねる。八宮は琴を弾き、薫が琵琶で合わせる。	328
	8	翌朝、薫、弁の尼から柏木と女三宮の秘密を聞き、文反故を受け取る。	329～32
46椎本	1	参詣の帰り、匂宮、夕霧の宇治山荘で薫らと遊ぶ。翌朝、八宮から文が届く。	4 －342
	2	人々、八宮に琴の演奏を所望し、宮が琴を弾く。匂宮、姫君たちに歌を贈る。	343～44
	3	七月、薫、久しぶりに八宮邸を訪ねる。八宮、姫君の後見を薫に託す。	347
	4	同夜、八宮が仏間に入った後、薫、弁の尼を召し、姫君たちと語る。	349～50
	5	年末、宇治の姫君に山の阿闍利から炭などが届く。姫君たちは綿・絹を贈る。	366
	6	薫、故八宮の仏間に入り、柱にもたれて歌を詠む。女房らそれを覗き見る。	371
	7	新年を迎え、姫君たちの元へ阿闍利から山菜などが届く。	372
47総角	1	同夜、薫、屏風を押しのけ仏間にいる大君に迫るが、かたくなに拒絶される。	390～92
	2	思いが遂げれなかった薫、大君と夜明けの空を眺める。	393
	3	薫と匂宮、六条院の勾欄により、秋の庭を眺めながら、宇治の姫君たちを語る。	409～10
	4	匂宮と中君、明け方、霧の宇治川を柴積む船が行き交う風景を眺める。	426
	5	十月、匂宮と薫一行、宇治で紅葉狩り。船遊びや管弦の遊びに興じる。	433～34
48早蕨	1	さびしく新年を迎えた中君のもとに、宇治の阿闍利から蕨や土筆が届けられる。	5 － 4 ～ 5
	2	薫が匂宮を訪ねると、紅梅を愛で琴を弾いている。薫、枝を折り、歌を詠む。	6
	3	中君が匂宮邸に移る前日、薫訪問。部屋を覗き見るが、中まで見えない。	10
	4	その後、中君と対面。宇治を去る悲しみに沈む姫を、薫慰める。	11～12
49宿木	1	女二宮の薫への降嫁を考える帝、薫を召し、碁を打つ。	5 －31
	2	帝、碁の賭け物として薫に菊を手折らせ、女二宮降嫁をほのめかす。	32
	3	薫、二条院の中君を見舞うにあたり、自邸の朝顔を手折る。	40～41
	4	匂宮、夕霧の六の君との結婚のため六条院へ出掛ける。残された中君憂悶する。	48～49
	5	匂宮が中君のもとにいるところに、薫からの文と蔦の紅葉が届けられた。	93
	6	夕暮れ、晩秋の庭を眺め、匂宮琴を弾く。中君、脇息にもたれ思いに耽る。	94
	7	二月、中君、無事男子出産。産養が盛大に催される。	99
50東屋	1	浮舟を中君に託した母、中君と匂宮、若君の睦まじい様子を覗き見る。	5 －143～44
	2	匂宮、浮舟の部屋に忍び、衣の裾を捉える。浮舟、扇をかざして振り返る。	155
	3	中君、浮舟に絵を見せ慰め、右近に物語の詞書を読ませる。	164
	4	翌朝、薫、浮舟を宇治の新邸に連れ出す。	178
	5	薫、故八宮遺愛の琴を弾き、浮舟と語る。弁の尼より果物と歌が届く	183～84
51浮舟	1	正月、宇治の浮舟より中君に文をつけた小松と髭籠が届く。匂宮も同席。	5 －194
	2	匂宮、宇治へ赴き、室内を覗く。女房らが裁縫する傍らで、浮舟は臥している。	200
	3	薫、浮舟を訪問。川の景色を眺めながら、歌を詠み交わす。	219
	4	雪降る中、匂宮、浮舟を小舟で連れ出し、橘の小島で愛の歌を交わす。	223
	5	浮舟に文を届けにきた薫と匂宮の従者が鉢合わせする。	237
	6	宇治に来た匂宮、邸に入れず、野原に侍従を呼び出して、事情を聞く。	253～54
52蜻蛉	1	春の夕暮れ、薫、庭の橘で時鳥が鳴くのを聴き、匂宮に歌を贈る。	5 －280
	2	夏の夕暮れ、女一宮や女房らが氷を盛って涼んでいる様子を、薫、覗き見る。	298
	3	薫、妻女二宮に昨日みた女一宮と同じ衣装を着せる。	301
	4	薫、六条院の東渡殿で、中宮付の女房らと言葉を交わし、歌を詠みあう。	313
	5	薫、夕暮れに飛び交う蜻蛉をみて、大君や浮舟との宿世を思う。	317
53手習	1	横川の僧都、宇治で大木の根元にうずくまっている若い女（浮舟）を発見する。	5 －327
	2	尼君が住む小野の庵での秋。門前の田で人々、稲を刈り、歌を歌う。	339～40
	3	月明かりの夜、尼君ら琴などを弾き、物語や歌を詠んで過ごす。	340～41
	4	その後、中将笛を吹き、尼君らと合奏する。	352
	5	尼君の留守中、浮舟、少将の尼と碁を打つ。	357
	6	出家した浮舟、ひとり硯に向かい手習いする。	367
	7	新年を迎え、雪降る中、浮舟、手習いにいそしむ。	377
54夢浮橋	1	薫、横川の僧都から浮舟のことを聞き出し、浮舟の弟に文を渡すように頼む。	5 －397
	2	小野の里の遥か向こうの谷を行く薫の行列を、尼たちが眺める。	399
	3	小君、薫の文を几帳越しに姉浮舟に差し出す。尼君、開いて浮舟に見せる。	405

浄土寺扇面本	土佐派 ハーバード画帖本	京博光吉画帖本	久保惣光吉画帖本	東博一得屏風本	堺市博色紙本	徳川光則画帖本	バーク光則画帖本	個人光起画帖本	静嘉堂光成絵詞本	住吉派 個人如慶画帖Ⅰ本	個人如慶画帖Ⅱ本	茶道具慶絵巻本	備考
			○										類例がほとんど知られていない場面。
												○	他に永青文庫扇面屏風など数例あり。
	○	○	○					○	○	○	○		若君の座る場所に若干の違いはあるが、いずれもほぼ同一の図様。
						○	○						ほぼ同一図様。
						○							他に国宝絵巻が同一場面。
							○					○	バーク本は絵詞にほぼ忠実。
	○		○										いずれも構図は異なる。
		○	○					○	○	○	○		いずれも図様ほぼ同一。久保惣本以外、薫のしぐさまで同一。
								○	○				両者、同一図様。
							○						類例がほとんど知られていない場面。
○										○			要素は共通。
○	○	○	○								○	○	要素はほぼ共通。
						○							類例がほとんど知られていない場面。
							○						類例がほとんど知られていない場面。
			○										類例がほとんど知られていない場面。
			○										類例がほとんど知られていない場面。
			○										類例がほとんど知られていない場面。
										○	○		如慶Ⅱ本は管弦の場面がなく、文を届けたところのみ。
								○	○				同一の図様。
							○						他に旧団家本が同一図様。
		○										○	茶道本未確認。
	○					○							要素・構図とも異なる図様。
						○							類例がほとんど知られていない場面。
							○						他に探幽五十四帖屏風・氏信五十四帖屏風などが同一場面。
											○		類例がほとんど知られていない場面。
						○		○	○				同一の図様。
		○	○									○	ほぼ同一の図様であるが、背景の描き込み要素が若干異なる。
○	○		○							○			浄土寺本と如慶Ⅰ本は対岸に女性を描く。
○	○	○	○					○	○	○	○		いずれもほぼ同一の図様。特に京博本と光起本は同一。
												○	フリア美術館光則画帖が同一場面。茶道本は「絵詞」とは要素が異なる。
						○							類例がほとんど知られていない場面。
							○						類例がほとんど知られていない場面。
							○						他に国宝絵巻・探幽五十四帖屏風が同一場面。
			○					○	○	○			ほぼ同一の図様。
	○					○							構図・要素とも異なる。
○													類例がほとんど知られていない場面。
						○							類例がほとんど知られていない場面。
											○	○	他に国宝絵巻・室町期個人扇面が同一場面。
			○										他に絵入源氏物語が同一場面。
			○			○							要素はほぼ共通であるが、構図は異なる。
	○						○	○	○				ハーバード本とバーク本はほぼ同一の図様。
											○		他に国宝絵巻・出光美岩佐勝友屏風などが同一場面。
○										○		○	両者の場面には時間差あり。
			○										他に伝宇佐神宮旧蔵五十四帖屏風が同一場面。
			○		○								場面に時間差あり。
○							○						両者異なる図様。
								○	○				同一の図様。
○	○										○		如慶Ⅱ本以外はほぼ同一の図様。如慶Ⅱ本は要素が若干多い。
○													他に絵入源氏物語が同一場面。
○			○							○		○	全体には同じ図様であるが、構図・要素が微妙に異なる。
								○	○	○		○	構図はほぼ同一であるが、茶道本には牛車が描かれない。
	○		○										ほぼ同一の図様。
						○							類例がほとんど知られていない場面。
						○	○						構図が異なる。
			○										他に個人氏信五十四帖屏風が同一場面。
			○										他に徳川美・徳川秀忠詞書画帖が同一場面。
										○	○		ほぼ同一の図様。
							○						類例がほとんど知られていない場面。
			○										類例がほとんど知られていない場面。
			○			○		○				○	光起と徳川本は同一図様。
									○				ほぼ同一の図様。
	○												類例がほとんど知られていない場面。
						○	○						ほぼ同一の図様。
○	○												浄土寺本は薫の行列のみ。ハーバード本は尼たちに主眼があり、大きく描かれる。
			○					○	○	○	○	○	要素は共通であるが、構図はそれぞれ異なる。

資　料　調　査

府内及び大友氏関係遺跡総合調査

平成９年度から継続している中世賀来荘の故地大分市賀来地区を対象に以下の調査を行った。①昨年度実施した用水利用状況の補足調査。②大字宮苑・東院の石造物確認調査。調査の概要については「Funai　府内及び大友氏関係遺跡総合調査研究年報Ⅷ」（2000年３月）で詳述している。

元弘三年（1333）銘の板碑（大字宮苑）

平成12年度特別展関係資料調査

平成12年に開催予定の第19回特別展「豊後国の眺め－古代の役所とくらし」開催のための資料調査を下記のとおり実施した。

１．関東方面

調査日　平成11年９月28日～29日　調査員　中西武尚（学芸調査係技術員）

調査日	調査機関	調査資料
９月28日	石岡市教育委員会	鹿の子Ｃ遺跡出土検田関係帳簿断簡、その他漆紙文書
	茨城県教育財団	鹿の子Ｃ遺跡出土漆紙文書
29日	国立歴史民俗博物館	古代国府関係資料

２．関西方面

調査日　平成11年10月26日～27日　**調査員**　中西武尚（学芸調査係技術員）

調査日	調査機関	調査資料
10月26日	京都市埋蔵文化財研究所	平安宮冷燃院跡出土緑釉陶器　３点
27日	奈良国立文化財研究所	・平城京跡出土文具類　・平城京跡出土銅製帯金具 ・銀製金具付皮帯（複製）　・興福寺一条院跡出土品 ・平城京跡出土硯、墨書土器、土馬他

３．九州方面

調査日　平成12年３月23日～24日　**調査員**　中西武尚（学芸調査係技術員）

調査日	調査機関	調査資料
３月23日	筑紫野市歴史博物館	岡田遺跡・大宰府条坊200次調査出土品
	太宰府市教育委員会	大宰府条坊跡出土品
24日	九州歴史資料館	大宰府史跡出土品
	福岡市教育委員会 鴻臚館跡調査事務所	鴻臚館跡出土品

資　料　収　集

資料収集委員会

１．会議

開催日　平成12年３月27日(月)

場所　大分市歴史資料館会議室

議題　(1)委嘱状の交付

(2)購入予定資料の審議

(3)その他（寄贈資料・複製品資料）

２．委員名簿

氏　名	役　　職	分　　野
賀川光夫	別府大学名誉教授	日本考古学
加藤知弘	大分大学名誉教授	日本海外交流史
豊田寛三	大分大学教育学部長	日本近世史
菊竹淳一	九州大学文学部長	日本美術史
段上達雄	別府大学助教授	日本民俗学
護　雅行	大分市助役	地方行政

寄　贈

(1) 竿秤（錘付）２点　代表　水田一男　氏

(2) 一斗枡（斗概付）１点　後藤幸七郎　氏

(3) 蓑　１点　児玉　保　氏

(4) 岡藩銀札（五匁札）・豊後真玉夷屋札ほか３点　西健一郎　氏

購　入

(1) 豊前国絵図　267×279㎝　１鋪

豊前国全域を描いた大絵図で、村名を楕円形の枠内に表記し、それを郡ごとに色分けし、また朱色の筋で道路を表わし、一里塚を道筋の両側の黒丸点で図示するなど、江戸幕府が諸国の有力大名に命じて調進させた「国絵図」と図式が類似する。幕府は、新田開発にともなう石高の増加や境界・道路・山川の変化を把握する必要から、正保元年（1644）・元禄９年（1696）・天保６年（1835）の三度の「国絵図」と、郷帳の作成を行っており、本図は、そのいずれかをもとに描かれたとみられる。凡例に表記された豊前国の石高の数値（24万4787石余）が正保郷帳（23万1680石余）と元禄郷帳（27万3801石余）の中間であることから、この間の状況を描いたと判断され、下毛郡に限ってみても、瑞嶋村・大諸徳村・江渕村・竿村など、「豊前国高帳（1702年）」や天保郷帳（1834年）にはみられない村名や、枝村の名前が記入されており、同地域の村の変遷を考える上でも興味深い内容のものである。

(2)「太閤朝鮮征伐ニ付義統豊後侍着到」　13×38.5㎝　１冊（長綴）

天正20年（1592）豊臣秀吉の命令で朝鮮へ渡海した大友軍の侍衆「七百四十四人」（実際は719人）の名前を書き留めたもの。本文書は、田北学編『増補訂正編年大友史料』28（昭和43年発行）の275号文書としておさめられている同名史料（「慶長三年(1598)」の年号を有するが、後述のように人名の重複や誤記があるなど、慶長３年の史料というよりは、その写しとみられる）と比べると、表題や年号、人名の総数や書上げ順序、誤記の部分など、かなりの部分で一致がみられるが、275号文書より人名が１名分（「太田左馬助」）多く記載されていることや、275号文書の中で「野津院衆」として重複してみえる「波津久主殿介」なる人物の一方を「波津久新助」と記すなど、底本により近い内容と判断される。なお、本文書は、「中島本」（大友家の末裔である「松野家」所蔵本の写本。奥書に「都合七百五十五人」とあるが、実際は741人を記す）に次いで多くの人名が記載され、また表題や総人数の記載例からそれと若干系統も異なることから、渡海衆の実体究明においては欠かせない史料とみられる。

資　料　収　集

資料収集委員会

1．会議

開催日　平成12年3月27日(月)

場所　　大分市歴史資料館会議室

議題　　(1)委嘱状の交付

(2)購入予定資料の審議

(3)その他（寄贈資料・複製品資料）

2．委員名簿

氏　名	役　　職	分　　野
賀川光夫	別府大学名誉教授	日本考古学
加藤知弘	大分大学名誉教授	日本海外交流史
豊田寛三	大分大学教育学部長	日本近世史
菊竹淳一	九州大学文学部長	日本美術史
段上達雄	別府大学助教授	日本民俗学
護　雅行	大分市助役	地方行政

寄　贈

(1) 竿秤（錘付）2点　　代表　水田一男　氏

(2) 一斗枡（斗概付）1点　　後藤幸七郎　氏

(3) 蓑　1点　　児玉　保　氏

(4) 岡藩銀札（五匁札）・豊後真玉夷屋札ほか3点　　西健一郎　氏

購　入

(1) 豊前国絵図　267×279㎝　1鋪

豊前国全域を描いた大絵図で、村名を楕円形の枠内に表記し、それを郡ごとに色分けし、また朱色の筋で道路を表わし、一里塚を道筋の両側の黒丸点で図示するなど、江戸幕府が諸国の有力大名に命じて調進させた「国絵図」と図式が類似する。幕府は、新田開発にともなう石高の増加や境界・道路・山川の変化を把握する必要から、正保元年（1644）・元禄9年（1696）・天保6年（1835）の三度の「国絵図」と、郷帳の作成を行っており、本図は、そのいずれかをもとに描かれたとみられる。凡例に表記された豊前国の石高の数値（24万4787石余）が正保郷帳（23万1680石余）と元禄郷帳（27万3801石余）の中間であることから、この間の状況を描いたと判断され、下毛郡に限ってみても、瑞嶋村・大諸徳村・江渕村・竿村など、「豊前国高帳（1702年）」や天保郷帳（1834年）にはみられない村名や、枝村の名前が記入されており、同地域の村の変遷を考える上でも興味深い内容のものである。

(2)「太閤朝鮮征伐ニ付義統豊後侍着到」

13×38.5㎝　1冊（長綴）

天正20年（1592）豊臣秀吉の命令で朝鮮へ渡海した大友軍の侍衆「七百四十四人」（実際は719人）の名前を書き留めたもの。本文書は、田北学編『増補訂正編年大友史料』28（昭和43年発行）の275号文書としておさめられている同名史料（「慶長三年(1598)」の年号を有するが、後述のように人名の重複や誤記があるなど、慶長3年の史料というよりは、その写しとみられる）と比べると、表題や年号、人名の総数や書上げ順序、誤記の部分など、かなりの部分で一致がみられるが、275号文書より人名が1名分（「太田左馬助」）多く記載されていることや、275号文書の中で「野津院衆」として重複してみえる「波津久主殿介」なる人物の一方を「波津久新助」と記すなど、底本により近い内容と判断される。なお、本文書は、「中島本」（大友家の末裔である「松野家」所蔵本の写本。奥書に「都合七百五十五人」とあるが、実際は741人を記す）に次いで多くの人名が記載され、また表題や総人数の記載例からそれと若干系統も異なることから、渡海衆の実体究明においては欠かせない史料とみられる。

⑶大分郡米良村庄屋文書　　一括（約600点）

延岡藩領大分郡米良村庄屋山崎家に伝わった江戸～大正時代の古文書類。年貢割付状、竈・人数などを書上げた「人別書上」、各種書簡、絵図、証文類など、同村をはじめ、周辺の村々の歴史を知る上で貴重な史料がおさめられている。

⑷「忠昭公、従高松府内江御入府行列次第」

24.3×805㎝　1巻

大給（松平）忠昭が府内藩主に任ぜられ、万治元年（1658）4月15日に旧領の大分郡高松（現大分市）からに豊後府内へ入部した時の行列（本書末尾に「騎馬」44騎、総勢991人が従ったとある）の内容を順に書き留めたもの。このときに従った家臣名やその知行高、またそれぞれの従者の数や持物なども記載されており、大給松平家の従軍の有り方や当時の家臣団編成を知る上で興味深い内容が記されている。同様の史料は、管見のかぎり、玉置家文書・岡本家文書・生石子家文書・「松平左近将監忠昭公御代留記」の中にもみられるが、それぞれ人名や従者の表記、また人数・行列の順序などに多少の相違があり、行列の実体については相互に検討を要するものといえる。なお、本史料は、本来「冊子」（現状で22丁分）であったものを、「巻子」に仕立て直している。

⑸賀来飛霞植物写生図

（チクセツニンジン図）26×37.5㎝　1幅

豊後高田（現豊後高田市）生まれの本草学者、賀来飛霞（1816－1894）の描いたチクセツニンジンの図。葉脈や幹・根、またメシベやオシベの構造までが詳細に観察し描かれており、飛霞の写生図の特徴がよく示された内容のものである。図中に「庚子晩夏仲旬」とあり、その干支から天保元年（1840）頃の作品とみられる。

⑹麻生　豊　資料　　30点

宇佐郡麻生村（現宇佐市）生まれの漫画家、麻生豊（1898－1961）の描いた漫画の原画および関係諸本・書簡などの遺品をおさめる。麻生は、関東大震災後の被災者を慰めるために描いて爆発的な人気を得た「ノンキナトウサン」をはじめ、サラリーマンの哀歓と暗い世相に生きる庶民の姿を描いた「只野凡児」、戦後には「息子の時代」・「ガッチャン」などを新聞に連載。彼の描いた四コマ漫画は、優れた風俗漫画として定評がある。本資料の中には、彼の代表作である上記「ノンキナトウサン」や、「只野凡児」・「息子の時代」の単行本もおさめられている。

⑺「訴訟留」（安政5年）　26×18.5㎝　1冊

安政4年（1856）～慶応元年（1865）におよぶ高松代官所支配の大分郡・速見郡内の、幕府領での訴訟の内容を書き留めたもの。当時、同領は肥前島原藩の預かり地（寛政11年～慶応3年）とされており、大分郡の高松陣屋には島原藩から高松詰め役人が派遣されたといわれている。本史料は、この肥前島原藩預かり時代の関係史料とみられる。

⑻錦絵「太平記拾遺、大友侍従義統」

24.5×18㎝　1点

歌川国芳（1797－1861）門下の俊英といわれた落合芳幾（1833－1904／一蕙斎・蕙斎・朝霞楼・洒落斎などと号す）が大友氏22代義統を描いた錦絵。改印がなく、また図中に「四八」の番号が刷られていることから、「太平記拾遺」シリーズの一絵として明治期に描かれたものとみられる。郷土の人物が題材にされた数少ない錦絵の一つ。

⑼刀剣押形　　35.7×240.5㎝　1巻

名作の刀、28振を押形にしておさめ参考資料としたもの。この中には、豊後の刀工として鎌倉時代に活躍した行平や室町時代の名工で知られる友行の刀もみえ、「豊後刀」の関係資料としても貴重な内容のものである。なお、奥書によれば、「寛永六年（1629）五月吉日」に「平野又兵右衛次幸」が編集したとあるが、本資料は、その写本とみられる。

⑽「龍渓君行状」　　26.5×19.5㎝　1冊

杵築藩主能見松平家3代、重休（在職：元禄4・1691年～正徳5・1715年）の生前の行状を、杵築藩の侍講、綾部綱斎（安正：1676－1750）が記したもの。綱斎は、重休から許されて京都へ遊学し、北村篤所・伊藤東涯のもとで学び、さらに江戸へ出て、室鳩巣・服部南郭らに師事するなど、当代一流の学者たちと交流を深めた。また、三浦梅園の師としても知られた人物。重休が名君と仰がれたのは、綱斎の進言が大だったと伝えられ、本史料は、正徳5年8月10に亡くなった重休に対して、その行状を綱斎が草したと伝えられる内容を記したもの。綱斎自身の手によるもの、もしくはその写しとみられる。

⑾「御代官勤役覚書 草稿」　15.7×21㎝　1冊

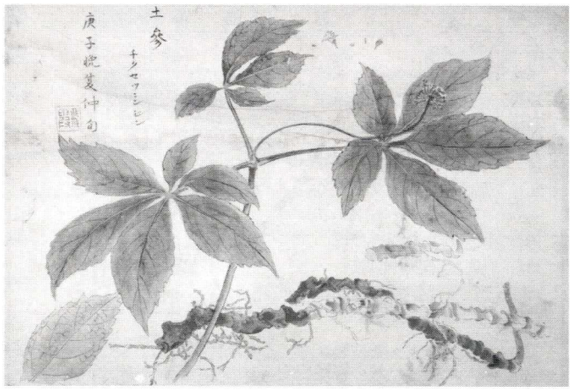
岡藩の代官制度の変遷や、その職にあった人名等を記したもの。竹田市立歴史資料館所蔵の「北村清士奥渓文庫」の中に「御代官勤役覚帳」なる史料がみられるが、本史料は、それに類する内容、もしくはその草稿本と考えられる。

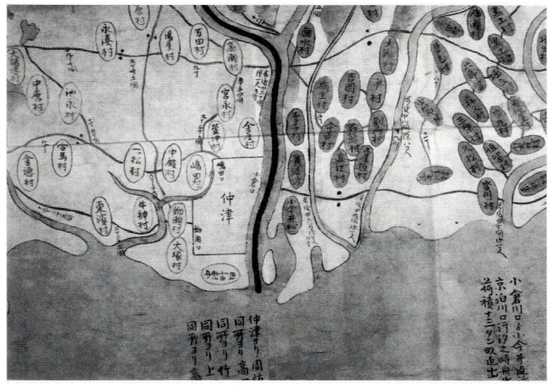
複製品製作

大分県文化課、別府大学、大野町から借用し常設展示している以下の縄文土器の複製品製作を行った。

①荻町浦久保遺跡出土深鉢　大分県文化課所蔵
②天瀬町平草遺跡出土浅鉢　同　　上
③竹田市楠野遺跡出土深鉢　同　　上
④大野町駒方遺跡出土浅鉢　大野町所蔵
⑤九重町二日市洞穴出土深鉢　別府大学所蔵

錦絵「太平記拾遺、大友侍従義統」


賀来飛霞植物写生図（チクセツニンジン図）



豊後国絵図（部分）

「太閤朝鮮征伐ニ付義統豊後待着到」

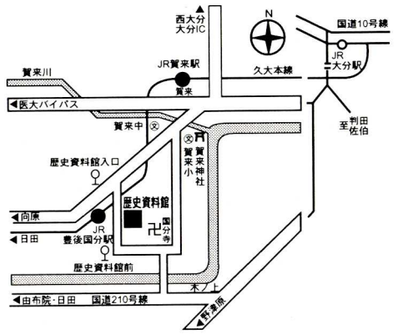
利　用　案　内

開館時間　午前9:00～午後5:00
（入館は午後4:30まで）

休 館 日　月曜日（祝日にあたるときは翌日）
祝日の翌日
年末年始（12月28日～1月4日）

観 覧 料　大　　人　200円（団体150円）
小中高生　100円（団体50円）
（市内の小・中学生は無料です）
＊　団体は20名以上
＊　特別展の開催中は別料金になる場合があります。

交通機関　ＪＲ久大線
○豊後国分駅下車
大分バス
○歴史資料館前下車
国分新町ゆき
向原ゆき（国分団地経由）
今畑ゆき（　〃　）
中村ゆき（　〃　）
竜原ゆき（　〃　）



大分市歴史資料館年報
2000
発　行　日　平成12年９月30日
編集・発行　大分市歴史資料館
大分市大字国分960番地の１
〒870-0864　(097)549－０８８０